くれたァ賴みもしねェ道理でね、こゝを一番、よく考へた貰ひてェ」

「むゝそいつァ萬事、見當違ひで聊か不面目だッた、なるほど、さういふ料簡なら及ばずながら、一年また上州の要助、それで濟む事なら引受けた、しかし本人は嫌だ、上州勝に引受けた」

「流石ァ場數を經て來た巧者もンだ、本人を偖置いて、この上州勝が縛ッたな」

「はゝゝ女ァ嫌だ、男、腐ッても男のこッた、まゝ活きた男の上州勝に賴まれた、しかし、三年の年期を何の事もなく無事に勤めたとはいふものゝ、實不意に飛び出した要助、今更また不意に抱へてくれともいへねェから、そかァお梅さンにね、つまり乃公がお梅さンに賴んだつもりでお梅さンから、うまく言ひ込ンで貰ひてェ、兩國の水茶屋以來、いはゞ橋渡しの要助、あれを他家へ奉公さしちやァ却ッて世間へ知れ渡るからと何とかいふ鹽梅でね」

「無論、安いこッた、ぢやァ今夜すぐ本人に話して置くから、明日でも都合よけりやァ天神横町まで」

「委細承知、しかし同じ事なら、上二番町が來合はした夜、ちよいと此處へ使者にでも知らしてくれさへすりやァ、すぐに飛び出して萬事その場で埒のあくこッた、あらためゝ屋敷へ出直しちやァ却ッて面倒だらう、うぬが勝手で暇を取ッた奴が、主人の弱身へ附け込むでもねェが、其穴を知ッて其穴の女から口を聞いて貰ふといふこたァ得て世間にある奉公人の常さ、その世間に得てある常の奴で通さねェと萬事の仕事が却ッて呵しくねェ、あンまり剝き出した小手が利き過ぎちやァ疑はれるからな、はゝゝゝ」

「なるほど、抜目のねェこッた、狼狽へて高飛もせず此の江戸で三年うまく頭巾を着通しただけの男よ、はゝゝぢやァ萬事、委しい事は更めて、また其うち」

「なァに別段委しい事を聞かなくッても、どうしろ、かうしろといふ其時の目的と段取だけ知らして置いてくれりやァ、きッと首尾よく爲遂げて見せるから、あンまり細ッかく委し過ぎると枝道が出來て迷ひの基だ、つまり人を痛めねェで二千石の奥様になりやァ宜いンだらう」

「はゝゝゝゝ全く其通り、外に委細のねェ事さ、上州勝が外から、この要助は内から内外ともに力を合すにも及ばねェが、先づ呼吸を合して、あの本人を上二番町の世取に祭り込むンだ、いはゞ互に自分の慾より何より面白半分、碁か將棋でも、さす氣になッて、はゝゝゝとンでもねェ好奇に生れたもンさ」

「どうせ生れてから死ぬまで、世間普通の帳面に書き入れられる男ぢやァねェからな、はゝゝゝ」

其七

卯月の空の夕まぐれ、鯨ほど圖なしの大男でも取組めば餌食にするといはれし鯱の與五郎が、また元の中間姿に立歸ッて天神横町のお梅が門口を、おそる〳〵そろりと引開けつゝ、四邊を見廻して下女を差招き、何をか小聲に私語けば、やがて奥の離れ座敷より、それと心得て出で來りしお梅が顔、おのれも兼て心得ながら、わざと俄に小腰を屈め面目なげの額を輕く叩いて差俯く體、さも眞實らしく更に牒し合せし顔色も見せねば、さすがのお梅も微笑を含みつゝ、なるほど上州勝が言葉、化けるといへば其場よりの化物、いよ〳〵尋常の奴で無しとぞ驚きぬ、

もとより兼て萬事を心得たるお梅、まして今宵わざ〳〵使を馳せて呼び寄せたるほどなれば、そのまゝ引返して奥へ行かんとする袖、そッと捉へて片手に拜みながら、

「定めて、お聞きなすッたらうが、實は過日お暇を、自分勝手の不意にお暇を戴いて今日まで其まゝ、しかし何處へ行ッても一人立の出來ない奴、また舞ひ戻ッたとは恐れながら、まづ三年間たゞの一度も御機嫌を損ねた事のない要助、どうか歸り新參の御奉公の相叶ひますやう、お屋敷よりも此家を見込ンでお願ひに上りましたから」

「あれ要助さン、その事は兼て」

「おッと、御承知あるべき筈はない、お屋敷を出てから今夜が初めての要助、はゝゝはゝゝこれまでのお馴染甲斐に、なるほど鯱とか何とかいふ太い野郎は、伺ッたかも知らないが」

「いや、よろしい、さういふ譯なら幸ひ今夜、あの奥へお越になッて居ますから、及ばずながら妾が、お願ひ申します間、ちよいと其處に待ッて居て下さいよ」

「何、願ッて下さる、しかも今夜お越になッて居るとは、はゝゝゝゝまだ主從の緣の盡きないところ」

お梅そのまゝ奥の離れ座敷に行けば、大林小三郎おもはず笑を含みながら、

「また男の聲がするやうだ、ありや上汐の幽靈で無いかな、はゝゝゝゝ」

「ほゝゝゝいえ外では御坐いませン、あの要助がまゐりまして」

「むゝ要助が來た、要助が來て何と申して居るな」

「實は三年の年期で、お暇を戴いた事は戴いたが、よく〳〵考へると今更ら他家へ奉公も、同じ奉公するからは、やはり、お屋敷へと、それを妾に」

「はゝゝゝ出た事は出て見たが、さて外に身の振方も面白くないと存じて、其方を賴みに來たのだな、過日もいふ通り、外のものとは違うて水茶屋以來の萬事を心得て居る奴、もし世間へ言ひ觸らしてはと存じて居ッた折柄、幸ひ、第一あの要助は小

氣轉の利いた奴、惜しいと思ッて居ッたところ、早速、これへ呼ぶが宜い」

「さぞまァ喜びますで御坐いませう、實はお暇を戴く時、年期は濟ンだと申すものゝ自分勝手のやうに出ましたもンですから、お屋敷の方へ出兼ねて、妾の方へ參ッたは、よく〳〵の事と存じます、もし萬一お聞入れのない時は、無理に妾がお願ひ申してとまで」

「はゝゝゝゝふしぎに要助の肩を持つの」

「御緣の橋渡し、妾のためには月下氷人で御坐いますもの、あの四谷へ隱居いたして居りまする母が、いつも左樣に申し聞けました、人は自分の運次第といふが、その自分の運も導いてくれるものがあッての事、つまり今かうして母子が思ひも寄らぬ安樂に暮すも、原因は、あの要助さンが手引をして下すッたのだから、あの人を大切にして忘れないやう、第一あの要助さンは氣が輕くッて心に毒のない人だからと

つね〳〵から母が大變に譽めて居りました、實は先達、要助が出たと承りました節、何だか急に力を失ッたやうな氣が致しまして、ほゝゝゝ」

呼び入れられたる鯱の與五郎、また浮世を忍ぶ淺黃頭巾すぽりと打被りて、もとの要助そのまゝ闔の此方に手をつきながら額越に見上げて平生よりも慇懃に身を縮めぬ、

「こりや要助、また歸ッて來たな、はゝゝゝ只今まで、どこに居ッた」

「面目次第も御坐いません、實は幼少からの友達に屋敷奉公よりも小商賣と勸められましたのが半歲ほど以前の事、しかし其節は、まだ年期も明けませぬ要助、口へ出してお暇を戴く譯にはまゐりませず、心にばかり待ち受けて其の覺悟の矢先、もし更めてお願ひ申し、却ッて此まゝ居れとの御意でもあッた時は、つまり退くに退かれぬ御恩の柵と存じまして、つひあの通り、しみ〳〵御禮も申し上げずに、今更ら後悔いたして居ります」

「はゝゝゝして、その小商賣の方は如何いたしたな」

「ともかく、その友達の家に當分の食客、實は見習かたく、一月あまりの今日まで隨分、氣も心も入れ替へて辛抱は致しましたが、何分大樹の下に雨漏らぬ世諺、おのれが喰ふ米の價も存ぜずに氣樂な屋敷奉公をして來たものには、目を皿にして針の穴の掃除をするやうな世智がらい勘定、算盤とッて一文二文の損得にも眞赤になッての喧嘩腰、とても氣骨が折れて出來ぬといへば、いや、すると言ッても無效だ、させる見込がないと、私からも友達からも雙方より呆れ合うた笑ひの果、また元の要助に立歸りましたものゝ、さて今更ら家風も御主人の御氣分も知らぬ他家へは、しかし、お屋敷の方へは何とやら恐れ多くて、つひ此家へ」

「ともかく其氣ならば、また元のまゝ勤めて見るが宜からう、いろ〳〵梅も其方の事を取持ッて申すから」

「有難う御坐います、決して其邊を當込ンでまゐッた譯では御坐いませンが、外に別段これというて、お縋り申すところもなし、では御言葉に甘へて明朝、すぐお屋敷へお伴を」

「むゝ今夜こゝで宿ッて、そのまゝ連れて歸らう、しかし要助、いづれへも此家の事を他言は致すまいの」

「どゞどう致しまして、たとひあのまゝ無事に小商賣人となりましても御恩は御恩、もし要助に、その氣が御坐いますなら、お屋敷を出て他人に言ふよりも、實は出際に此家へでもまゐりまして、兩國以來のお馴染、御餞別の一つも戴きます筈」

「はゝゝゝなるほど、それに就いて梅も殘り惜しいと申して居ッた事があッた、なう梅」

「さやうで御坐います、要助さンも要助さン、あンまり情のない人と、實は恨ンで居

たくらゐですよ」

「いや、もうその御言葉だけで結構、根に物がないから音ばかりで風のやうな奴だとは、かねぐ人にも笑はれます要助も、世間體の空笑ひして出がけに此家へ御挨拶に來るほどのものなら、小商人になれたかも知れませン、はゝゝゝゝ」

庭を隔てし母屋の一室に打臥しながら、わざと行燈の火を暗くして朧に天井の節穴を數へながら、要助たゞ一人、胸邊に手を置いての一思案、

人の風聞も七十五日、このまゝ三年たてば罪も亡ぶの凡例、まして相手を殺せしとはいひながら、銀張勝負に大部屋の喧嘩斬、公だッて訴へられたる身では無し、たゞその死骸への申譯、一つには其相手の兄弟分が我を覘ふ手前、逢はねば其まゝ逢へば男と男、捨てゝも置くまじ置かれもせずの果に世を忍びし奉公、されど三年の後に出て見

れば、江戸を高飛せしと思ひの外、この江戸に居た鯱の與五郎、あの分で名乘られてはは飛んだものに義理が立たぬと喚き出した奴等、えゝ面倒ついでに其奴等も冥途へ送ッてやらんかと思ふ折しも、おもひも寄らぬ上州勝に賴まれて、また元の要助に立歸りしものゝ、さて今あの次男を世取にせんとすれば、何としても總領を無事には置けぬ筈、いかに上州勝が心を碎いて血を見ずに爲遂げる工夫ありとはいへど、わけて千石の別知を取るほどの器量人、第一が家の面目とて平生より親が自慢の寵愛、まさか外より手を取ッて引き出すべき策略もあるまじく、病身でもなきものを俄に若隱居さす事も叶はず、その他に自滅さすべき思案は猶更、つまりは出來ぬ相談、功なき骨折に此の鯱を使はんとは尋常ならぬ一物、うか〳〵油斷せば一人で働き死になるべき不運を呑負ひ込む道理、なるほど本人のお梅とは格別、たとひ惡ながら底に毒なくて透き通るほどの男は男なれど、高が二千石に緣もない小女郎一疋を持ち込まんとての苦

勞、たゞ一筋の好奇ならねば、もしこの鯱を煮て喰はんとする曉の一分別、なくて叶はぬところと、流石は場數者、しきりに枕を替へて人知れず心の中の工夫を凝らせしが、いつしか夜半の鐘の音きこゆるころ、おもはず微笑を漏らして寐ながら首肯きぬ、さァ鬼でも蛇でも取ッて喰ひに來い、

きぬ〴〵の情を運ぶ花街ならねど、世間を忍ぶ戀路の朝歸り、もし知るもの〻人目に逢うては蒼蠅しと、まだ旭の影も軒に射し入らぬころ、はや起き出でて立出づれば、とくより要助まちうけて微笑を漏らしながら、

「相變らずお早う御坐います、これまでは要助のお迎ひが早いためと、をり〳〵お梅さンに無言の怖い目付で睨まれましたが、今日からは其罪も自然に遁れます道理、大體お屋敷でも、お早起の御性分、はゝゝゝ」

おもはず聲をあげて笑へば、みだれし鬢を搔き撫でながら送り出でたるお梅、わざと氣を立てゝ顏に薄紅の風情、

「あれ要助さン、いつ妾が、怖い目で睨みました、嘸お寒いのに、まァ御苦勞さまと御禮を言ッた覺えはありますが、睨ンだ事は」

「無いとは言はしませン、あンまり睨みやうが怖ろしくッて、女の一念どこで敵を打たれるかと、この要助おもはず袖の下から拜ンだ事もある筈」

「ほゝゝゝこの天神樣を拜ンだ事はあッても、妾を何のため」

「しかも其時、こりや要助、何を致すとお叱りを蒙ッたのが何よりの證據」

「えゝお歸りの今更そンな證據立は」

「しかし、無いといはれて見れば生涯、嘘を知らぬ要助の顏が」

「その顏を立てゝあげたればこそ、かうして及ばずながら、歸參の叶うた筈」

「なるほど、しかし、それは別段の談話」

「いえ〳〵別では御坐いませンよ、お氣の毒でも御勘定に入れて置いていたゞきませう」

お梅も要助も互に揃ひし曲者、いざといはゞ人の生命も練馬大根も一目に見るほどの奴ながら、小兒に等しき言葉爭ひは言ひ合さねど自然に通ふ心と心の一體、それとも知らねば中間に立ッたる大林小三郎、おもはず高笑ひして、

「はゝゝゝ梅は兎も角、まだ年も取らぬ女の事、要助、手前は男で今年もはや幾歳になるの、たしか三十七でないか、馬鹿め」

お梅は片足とんと鳴らして勝負に勝ッたる顏色、要助おもはず目を白くして面を膨らしつゝ自己が脣端を捻りながら、

「三十七は正に三十七の男で御坐いますが、全體こいつが悪いので、あ痛、畜生、痛

けりや何故、つまらン事をいふンだ、いくら理があッても三十七の南瓜野郎が十九の春の色香に叶ふもンか、第一お持主が御承知なさらねェぞ、同じ御恩の畑に出來ても世間の相場が違ふよ此野郎め、あ痛」

「はゝゝゝ要助、思ひ切ッて捻ッて置け」

「要助さン、もし何ですなら、あの釘拔でも持ッて來てあげませうかね、ほゝゝゝ」

「いやもう、それほどまでの御深切には及びませン、はゝゝゝゝ」

其八

これまで三年の奉公は仔細あッて自己が世を忍ぶための塒、もし現はれても萬一の楯に取ッて身を守る用意なりしが、今こゝに歸り新參の要助は人知れぬ心の一物、なるほど血さへ流さずば總領次男の順はあれども同じ親より出でて同じ血筋の種、しかも

結句は同じ主ながらも現在の朝夕に我身の主と定めし人の幸福になる事、よし引き受けたとは上州勝への返答ながら、此奴そも〳〵頭上の盆の窪より脚の爪頭まで他人のために膏汗流して働く奴ならねば、ついでに自己が身の工夫もあッて、いはゞ同じ乘合の舟の艪柄を握ッて漕ぎ出す體、港は一緒心は兩道、まづ御無事で互に着きましたと挨拶の後は西と東に袖を分たん心、されど途中の難船難波を諸共に凌ぐべき男とは上州勝の早くも覘ひしところ、まだ覘はれしと知ッてその術に乘りし男、さればこそ本人のお梅には引受けねど、思ひきッて上州勝に引受けしとの一言、これぞ動けぬ後日の釘を打ッて叩いた鯱の與五郎ぞと我ながら笑を漏らしぬ、

同じ兄弟ながら幼少より部屋も召使ひも萬事の別、その兄の中間を扨置いて弟の中間に俄の御用とは何事ぞと、不意に呼ばれたる要助おもはず眉を顰めながら庭口の小門

より入りて奥の縁端を伺へば、兄の主水そのまゝ障子を開けて端近く出でつゝ、みづから手前の抹茶に氣を慰めての笑顔、そッと四邊を見廻し聲を顰めて語りぬ、

「要助、其方は年期があけて出たと聞いたが、また歸ッたの」

「へエ、一應は年期をお勤め申しましたが、やはり、お屋敷が戀しくッて、また御恩を蒙ります、何分これまで通り、御目かけられますやう」

「いや、其方の勝手ばかりでない、とかく家風に馴れたものは、置く方にも萬事の便利、わけて部屋住の弟に取ッては猶更、はゝゝゝいつまでも末永く面倒を見てやッてくれ、あの通りの我まゝもので、勤め憎うもあらうがの、氣は知る通りの潔白」

「いえもう、實のところを申し上げますれば、あのやうな方を御主人に持ッた後、どこへも勤まるもンでは御坐いませン、つまり要助が身の倖僥、不行屆の段は、お叱りを蒙りながらも末長く御奉公が致したう御坐います、なほ貴方樣よりも宜しく」

「よい〳〵、承知いたした、時に要助、そッと内々で聞きたい事があッての」
「いかやうな義で御坐いますか、要助の存じて居ります事は」
「存じて居る段か、ちと存じ過ぎて、それがため心配いたして居るくらゐ、實は外でもないがの、近來あの小三郎が、をり〳〵部屋をあけて、いづれへか宿り込むやうだが、どこへまゐるか其方の知らぬ筈は無からう、すでに父上も、うす〳〵御存じの様子、しかし一旦、お口へ出された以上は根を掘ッて何處までも詮議せられた上、もし身分柄にでも觸る義であれば我子とて其まゝにも捨て置かれぬ御氣性、また弟も、あの通りの一徹者、おのれの恥辱と思へば、たゞ詫びたのみでは置かぬ氣性、ところでそれまでに兄が、何とか分別いたして置きたいため、要助、あらためて其方に聞くが、なまじひ弟を思うて無用の隱し立を致すと却ッて忠義にはならぬぞ、よしまた、いかやうな事があるとも、たゞ二人の兄弟、決して惡うは致さぬのみか

弟ながら一門一家中は勿論、他家の譽物にもなッて居るほどの男振、外より現はれて折角の名を損ぜぬうち、何とか致して置かねばならぬ筈、決して弟の隱すことを掘ッて兎や角いふ譯でない、もしそれならば其方に聞かずとも」
「いち〳〵御道理に御坐います、なるほど、まだ御部屋住の御身分で外に私の朋輩も御坐いませぬ以上、この要助が今更ら存ぜぬと申し上げたところで、立つ筈は御坐いませンから、をり〳〵夜中、そッとお忍びで、お伴いたす事は御坐いますが、さて、そのお忍び先は少々私の身として申し上げかねます」
「これ要助、今もいふ通り、弟が部屋を明けて、いづれへか夜中まゐる事は、其方がいはずとも既に分ッてある事、それがため其方に、つまりその、忍ンで行く先を聞くために要助、わざ〳〵其方を」
「いえ、お言葉は能く分ッて居りまするが、そのお忍びで、おいでになるほどの義で

御坐いますから」

「いよ〳〵申さぬといふのか、これまで事を分けて問うても、其方は決していはぬと申すのか、もはや致し方がない、只今すぐ屋敷を出て行け、部屋住の弟の召使ひを家の總領の兄が暇を遣はす、また弟は今日から禁足、たとひ一寸たりとも門外へは出さぬやうに致せば濟むこと」

「いえ、さやうに御立腹遊ばしては、この要助は兎も角」

「それならば、有體に申すが宜い、これが他人にいふことでは無し、現在の兄が聞いて弟の身の爲めにすること」

「實は眞實の義を申し上げますれば、いさゝか世間を憚る思召の女が」

「いや女は知れてあるが、さて其の女は何者で、いつごろから」

「さやうで御坐います、つい近來、去年の夏ごろから、しかし、かやう申し上げては

何とも恐れ入りまするが、決して見苦しい女では御坐いません、なるほど、思召のあッたも御無理は無からうと存じまするほどの、美貌といひ氣立と申し、今年やう

やう十九とかに聞き及びまする」

「はゝゝゝ要助、其方が口から申譯めいた事は一切無用にして、たゞありのまゝにいふが宜い、して其の女いづれに居るな、素性は、名は何と申す」

「身の素性は委しく存じませンが、これも、まンざら根からの賤しい女では御坐いませぬ樣子、名は、お梅とか申しまして、母親たゞ一人御坐いますばかり、その外には」

「むゝ梅といふ名で、としが十九、去年の夏ごろから、して何處に住ンで居る」

「そこまでで御免を蒙ります、よし住所を委しう申し上げましても、たゞお聞き遊ばすだけの事、わざ〳〵お越になる筈も」

「いや〳〵その住宅が專一、わざ〳〵まゐらずとも、また如何やうな事で、ついでに餘所ながら見に行くかも知れン、素性と氣立さへ差支なくば、それほど弟が執心の女、無理に今が今、事を荒立てゝ生木を割くにも及ばン、品に依ッては兄が心で、父上の手前また却ッて都合よく取計うても遣はすが、さて此ごろのやうに、しげしげ通うては身のために宜しくない、第一もし世間へ聞えても家風に係はる事、わけて小三郎は養子にまゐるべきもの、しかも近來しきりに諸方から懇望せられて、中にも案外の大家からも是非にも望まるゝ折柄、さやうの風聞があッては本人の幸福を取外す原因、しかし要助、もしその女の身の行末を立つやうにさへして遣はせば弟の方は別段、まづ其女の方を、とかく世の中は利慾での」

「へい、ところが、あの女は、なか〳〵利慾では迚も、なるほど、身分の相違も御坐いますから、世間晴れて、とまでは考へて居りますまいが、實のところを申し上げ

ますれば、そも〳〵女の方からの戀で、生命にもかけて居りまする樣子、をり〳〵お通ひ遊ばせばこそ、もしこれが一月二月も絶えました時は、おもひ餘ッて女の一念、前後も顧みず如何やうな騷ぎを致しますやら、却ッて世上へ高く漏れまする道理、元來が夢中になッて居ります上、かうと思ひ詰めた一念、なか〳〵世間普通の慾得づくで通る妾氣質では無いかのやうに心得ます、こればかりは要助が露一點の申譯めいた義では御坐いませン、もし疑はしう思召せば、最早こゝまで打ち明けて申し上げました事、平河町の天神横町に格子づくりの四間口、恐れながら何人か、お遣はしになりまして萬事お探り遊ばせば、美貌氣立は勿論の事、只今申し上げました委細は、いやもう私も此年まで、あのやうな女は見た事も御坐いませンほど」

「むゝ全く其方がいふ女として見れば、聊か困ッたもの、出世前の弟に、今更ら藪蛇の譬へをさしたくも無し、しかし、いつまで其まゝに差置いては猶更ら以て身のた

めにならぬこと、はて困ッた」

「實は、私も、及ばずながら人知れずに、いろ〳〵と思案を致しまして、萬事お耳へ入らぬうち何とか、工夫をと存じましたものゝ、なか〳〵傍へも寄り付けませぬ雙方の火の手、迂濶に足らぬ水を注ぎましては却ッて油も同然の勢ひ、それがため、つひ〳〵今日まで」

「むゝ、いよ〳〵捨て置けぬ、これが花街の賣女でもあれば、また何とか仕様もあらうが」

「何分、十八の處女が生命にかけて思ひ込んだ初戀を遂げた其まゝの一生懸命、現在の母親さへ呆れて行末を心配いたして居りまするほどの始末、これが互に相應の釣合身分といふではなし、いづれ一度は、もし其時に一人娘を失うてはと、平生そればかり苦に病ンで居りますくらゐで」

「女は身を削る斧、外面如菩薩などと常に申して武藝一途の物固い弟であッたがの、なるほど魔力とは此事、しかし要助、この兄が窃に聞いたといふ事は内分にして置けよ、そのうち一工夫いたして、いはゞ雙方のため、その女も行末遂げぬ男に若い身空を過つも不便の至極、もし小三郎が家の世取ででもあれば、また妾も世にある習慣、さして害にもなるまいが、何と申しても他家へ養子にまゐるべきもの、それに前々より、さる女あッては先方へ濟まぬばかりか、親といひ兄といひ二人とも平生の教訓、不行屈を笑はるゝ道理」

「なるべく、事の荒立ちませぬやうに穏かに、第一が女の方の得心いたしますやう、只管御工夫を願ひ上げまする、また内分にせいと仰せられずとも、私が何と致しまして、もし此事が要助の口より漏れ聞えたといふ曉には、恐れながら其日お暇を願ひます、あの御氣性と、あの御武藝で、こりや要助こゝへ出よと仰しやッた時は、

いやもう遁げ出す間も」

「はゝゝゝゝその段にかけては當時隨一の達者もの、油斷がならンぞ要助、はゝゝゝ

はゝゝ」

しのぶ戀路を通うてより凡そ半歳あまり、いかに臥房は棟を隔てし部屋なりとも、同じ屋敷のうちに多くの人目、いづれ斯くあるべきは固より其道理、もし知れし時は此の要助が一番に引出されて内詮議あるべき事も兼て覺悟の前、さらに驚かねども、もし不意に天神横町を窺ふものあらば萬事の手筈に都合もあらんと、その夕暮そッと用事の體に走せ出でて、お梅が門の戸を引き開くるや否、聲を潜めて首を伸ばしつゝ急用々々と差招けば、お梅おもはず眉を顰めて出で來るを、そのまゝ差倚ッて腰うちかけながら、

「お梅さン、外でも無いがね、ちよいと言ッて置く事がある、實ア今日、屋敷の總領樣に呼ばれて近ごろ弟が何處へまゐるか、をり〳〵部屋をあけて宿ッて來る樣子、ついては要助、其方が知ッて居る筈、知らぬと申されぬ筈と問ひ詰められたから、どうせ仕方がねエ事と思ッて、すッかり白狀して仕舞ッたから、萬事その決心で、しかし要助だ、いや此家ぢやア要助といふより鯱と言ッた方が宜からう、その鯱が尾鰭を隱して返答したンだから、まさか素人臭エ事はいはない筈、安心はして居ても宜いが、まづ其事だけは承知して居ないと都合が惡からうと思ッて、ちよいと注進に來たンだが」

「おや、さうで御坐いますか、いえ其事なれば妾も兼て覺悟して居りましたから、別に心配はしませン、ことに依ると此方の出やう次第で、却ッて都合が宜くなるかも知れないくらゐに思ッて居ます、どうせ半歳の間ですもの、世間へは知れないにし

ても現在の屋敷へは、勿論の事、これがいつまで知れずに居ては何だか物の調子が張合なくて、ほゝゝ手の出しやうも日の付けやうも、まるで見當が外れますからねエ」

「なるほど、流石ァお梅さン、相變らず太いもンさ」

「しかし、お金や威嚇では迚も切れる女ではないといふ事だけは、御如才もなく念を押して置いて下さいましたらうね」

「はゝゝゝその念を押すばかりか、實ァ女の方から夢中に惚れ込ンで方角も分らないほど迷ッて居ますから、たとひ二千石の世取に据ゑて玉の輿で迎ひに往ッたところが、そンな野暮な事より男女もろとも茅の柱に蠣の屋根と言ッて置いたよ、はゝゝゝ全く遣り損ッた曉はお梅さン、さうだらう、二千石と戀と天秤に掛けた日にやァ七三ぐれエの割合か、やう〳〵四分六、まさか五分五分たァいくめエの」

「その邊は、まだ量ッた事がないから、よく分りませンが、妾の氣では實のところ、まづ五分五分ですね」

「うまく言ッて居るぜ、もしあれが二千石の次男でなくッて、たとひ丸裸でも隨分お取上げになる筈の男振、つまり戀の叶ッた上の慾で、抱き上げるか抱き下すか二つに一つといふンだらう、どッちにしても松に搦ンだ蔦紅葉、ぐるりと身を纏ひつけて置いて枯れるまで放さねエといふ色慾だから怖ろしい、世の中には慾色といふのがあるが、お梅さンなァ色慾だ、慾から出た色は褪際があッても色から出た慾の褪めた凡例はねエさ、はゝゝゝ」

「色慾か慾色か、そンな事は知りませンが、妾の事を聞いて全體どうする考案でせう」

「どうッて、つまるところは、さう兩方から思ひ合ッて居ちやァ急な事には出來めエが、親御や兄樣の氣では、今のうちに無事に別れさして仕舞ひたいのさ、これが同

じ家柄とか何とかいふならばだが、何分、世間を憚ッて忍ぶ戀路といふンだからな、實ァ御難物さ、しかし御難物だけに面白いのよ、どうせ一方は嫁になる身、一方は嫁を取る身、幸ひ雙方の思ひ合ッたところで親と親とが手を拍ッて出來るといふンぢやァ味も何もねェのさ、はゝゝゝしかし兎も角、どンな女かといふので餘所ながら見に來るかも知れねェから、お梅さン、その用心だけはね、宜いかね、ところで兄樣が見に來られて、なるほど、弟の通ッたなァ道理至極、無理のねェ中央を通り越して、はゝゝゝつまり弟のものは兄のものといふ理窟で、談話が出來りや二千石そのまゝ手數も掛らず眼前で丸取だ」

「ほゝゝゝいつかも妾が、ある人に言ッた事があるの、たとひ義理に迫ッて位牌間男はするとも、生涯に生きた男二人は持たない覺悟の梅、これだけは要助さン、買ッて欲しいところですよ」

「はゝゝゝいッその事、男が死ンだら尼になッて亡き後を墨の衣の涙念佛といふ方が宜からう、今の男振り圖に越えて美いから生きた男を二人は持たねェなぞと立派にいへるが、わかるもンかね心の中は、その時その場が浮世萬事の勝負さ」

「あれ、おもひの外に安く買はれた事」

「いや、世間の奴等ァ高く買ふかも知らねェが、この鯱は前金を拂はねェよ、はゝゝはゝゝそりや兎も角、今いッた通りの始末だから、如才も無からうが、氣を付けてね、こゝは一番その腕に糾のかけどころだ、色戀の外で兄樣も惚れさすだけの働きが無くッちやアいけねェ、外の役廻りは隨分、とぼけねェやうにするが、こりやァお梅さン、其方が持切の大役だよ」

「大丈夫、安心して下さい、たとひ鬼が覗きに來ても無事には歸しませン覺悟、しかし、いづれ要助其方が案内せいと來るンでせうから、萬事その場の呼吸だけは」

「おッと承知だ、その邊を取外す男でねエ、また取外さす女でも無からうから、こゝは雙方兼合の本藝、別段、上州勝に知らすにも及ぶめエから、二人で首尾よく遣ッた上、これ〳〵、前後の委細を打明して驚かしてエもンだな」

「妾は兎も角、淺黄頭巾の要助さンが影身に添ッて居て下さるンですから、きッと面白い事が出來ますよ、いづれ夜でせう、まさか白晝」

「そりやァ夜さ、大體が物固くッて加之も部屋住たァ違ッてるから、猶更ら人に顔の見られねエ時分さ」

「ほゝゝゝゝそろ〳〵氣の早い化物の出かける頃ですね」

「はゝゝゝゝ化物が腕を擦ッて待ッて居るンだから堪らねエ、ぢやァ宜いかね、どういふ工合になるか今こゝで打合す譯にも行かねエから、萬事は其場の出來次第さ」

「御苦勞さま、どこへ出しても大手を振ッて通る立派な男の中の男をね、わざ〳〵、

堪忍して下さいよ、つまり何かの緣でせうから」

「有難い御緣に繫ッたもンだ、どうか泣き別れの腐れ緣にしたくねエな」

「惡緣なら猶更ら深くッて離れないもンですから、その氣で覺悟して居て下さいよ、つまり諦めて下さいよ、ほゝゝゝゝ」

其九

枕を高くして夢あたゝかに睡れる時にも、寐覺勝の眼を見開いて我身を覘ふものありとは知らず、たゞ一筋に弟を思ふ心に引かれて、それほど深く契りし女ならば餘所ながら一目みて後、また思案も工夫もあるべしと、或夜の宵闇、今夜は親戚に所用ありて父に從ひつゝ弟の出で行きしを幸ひ、そッと要助を呼んで其まゝ裏門より忍び出でながら、

「要助いかゞ致してまゐらうな、こゝは其方の働き、同じ事ならば要助、それとはなしに親しく會うて一つ二つの談話でも致さば、いかなる女か、あらまし氣心も知れる筈」

「それでは斯う遊ばせ、甚だ恐れ入りますが時と場合、つまり御次男樣とは御兄弟よりも親しいほどの友朋輩で、をり〳〵陰ながら風聞ばかりを聞かされて迷惑の折柄、幸ひこの要助に平河天神の門前でお逢ひ遊ばした體、こりや要助、大林氏が平生から自慢の穴は此邊と聞いたが是非に案内せいと仰せられた分に、はゝゝゝつまるところ要助が其穴へ使者にまゐる鼻を捻ぢ曲げられて閉口のあまり、他の方ではないといふ理由で、そッと御案内申した風に」

「なるほど、それが宜からう」

「しかし、どうせ後日では分ります事、この要助が謀ッて御案内申したと知れました時は、いよ〳〵」

「いや心配いたすに及ばン、萬事この胸にあるから安心して居れ」

「御次男樣の方は兎も角、お言葉に依ッて安心は致して居りますが、あの一方が女の一念で、もし狂ひ出した日には、第一要助が犠牲、輕くて呪詛殺されるかも知れません」

「はゝゝゝゝそれほどの女に祈り殺されたら其方の本分であらう」

「これはお言葉で御坐いますが、あはれな事には、要助まだ四十の年に間が御坐いまして、しかも妻帶も致しませンもので、今このまゝ女に祈り殺されては死ンだ親どもに申譯もない始末で、はゝゝゝゝ」

語りながら歩めば、はや天神横町のお梅が門口、要助まづ走せ入ッて暫し何をか私語きし後、そッと戸外に立出でて小腰を屈めながら、わざと小聲に額越、

「首尾よくまるりました、しかし本人、全く俄の事にて途方に暮れました様子」
「さもあらう、實は思ひがけない不意を襲はれたから、なるほど、わけて世間を憚る女、はゝゝゝ、聊か可哀さうなやうな氣が致すの」
どこに聊かの可哀さう氣があるべき、ござンなれと待ち受けて玉を展べたる腕に幾條の糾をかけつゝ、戀ならねども笑渦の露の深いところへ無言に引き落すか、但しは丹花の唇端を開いて奥紅を含むが如き舌三寸の間に取ッて押へるか、いづれにしても文武兩道の外に飛び出でたる案外の曲者、影なき敵に向うて組打つが如し、要助そのまゝ萬事を心得顔に奥の離れ座敷へ案内しつゝ、茶をすゝめ菓子を持ち運びながら、
「どうか暫時、恐れ入りますが何分まだ今年やう〳〵十九の申さば娘氣、外の方とは違ひ、別けて御入魂の間がら、其まゝ御免を蒙ッて早いが何よりの御馳走と申し聞

けましても、なか〳〵實は恥づかしさが半分以上に取上氣せましたる體、全く罪なやうで御坐います」
「はゝゝゝ、罪は、要助、其方一人の業で濟むから」
「これは今更ら迷惑に存じます、先刻さやうなお約束では御坐いませン筈」
「いや、弟に恨まれるのは兄の役で、女の方は其方が引受の役」
「その女が怖ろしくッて堪りませン、どうかお役を振替を願ひます、はゝゝゝ」
「當分まづ聞屆けはならンから覺悟いたせ、いづれでも忠義は同じ事、要助こゝは其方に忠義をさせて遣はすから有難く思へ、はゝゝゝゝゝところで此處は小三郎の宿る部屋と見えるな、あれほどの奴も僅十疊たらずの此の部屋へまるッては、わけもない者になるとは怖るべし女色の淵、溺れては迚も急に這ひ上れまい」
をりしも天生の美人が今ぞ一期の浮沈と思ひを凝らし心を潛めて飽くまでも色香を作

り上げたる風情、春に誇る萬木の花を一輪に集めて寸隙もなく露を宿せるが如く、見る目もまばゆく輝くかと思はれぬ、

離れ座敷の入口に小腰を屈めながら、聲しづかに情を含んで、

「要助さん、伺ッて下さいましな」

「いや伺はなくッても宜いから、お這入りなさい、實はお待兼だ」

御免あそばしませの聲と共に、名花に等しき姿そのまゝ身を潛めて辷り入りし風情、兄の主水じろりと見るや否、なるほど世に珍らしき美女、さてもくと今更に目を斜めにして思はず欹てたる顔色、お梅そろりと額越に見上げて言葉も淀まず兩手を支へながら、

「お初に御意を得ますが、妾は梅と申しまして、御覽遊ばす通りの賤しい不束女、今宵のところ、たゞくこの要助さんを、お恨めしう存じます」

要助おもはず目を丸くして主水を見遣りながら、

「こりやア迷惑いたしましたな、お梅さん、實は今も、そッと言ふ通り、この方は、何事も隔意のない御入魂のお間柄で、いやはや、おもひもかけぬところを、要助これ待てとの仰せ、はゝゝゝしかし、外の方とは違ひ、ともかく御案内申した譯で」

主水は微笑を含みながら、膝の上に兩手を置いて、そッと輕く會釋の體、

「不意に押し寄せて嘸、迷惑いたされたらうが、いや決して差支のないもの、さ、もう少し進んで、はゝゝゝこれ要助、遠慮いたさせぬやう馴染の其方が取持たぬか」

「あの通りのお言葉だから、お梅さん、決して心を措きなさるには及ばない、さア平生の通りで」

「それくゝ常の通りが宜い、別段あらたまッては却ッて、互に隔意があッて宜くない」

「有難う御坐います、これをまた御縁に、この後とも何分に、よろしくお願ひ申し上

げます、お目にかゝらぬ前は、いろ〳〵と心配ばかり致しまして、實は、どう御挨拶を申し上げて宜しいやら、どきゞと胸が、しかし、かうしてお目にかゝれば、いづれ此後とも御世話さまになりまする身、却ッて今は嬉しいやうな氣が致しましてねエ、要助さン、最初は、ほゝゝゝゝ遁け出さうかと思ひましたよ」

「ぢやァ、もうこの要助を恨む事は無いでせう、はゝゝゝゞ怨まれたり喜ばれたり、いやもう、いろ〳〵な目に逢ふこッた」

「どうせ、お取持役は迷惑の多いもので御坐いますよ」

「全く其通り、いや、なか〳〵如才なく寸隙なく斬り込むから油斷がならンぞ要助、其方も一番、こゝは負けぬ氣を出して、はゝゝゝゝ」

「いくら負けぬ氣を出しましても、とても無效、叶ひますもンか、あの美顏で、あの目元で、あの花の莟のやうな唇端から、やわ〳〵と眞綿で首を絞めるやうに來るン

ですもの」

「さう要助のやうに臆病風を引き込ンで仕舞ッては太刀打にならない、ぢやァ組打を致せ、組打なら少しは取得があるだらう」

「いや、太刀打でさへ叶はない剛敵で御坐いますもの、どう致して組打が、組打は女の業で、いかなる男も組打で、まゐるものと昔から定まッて居ります、まして自然に鬼挫ぐ體とは此こと、鬼でさへ挫がれるものが人間も人間、要助如き凡夫の一文奴が、はゝゝゝゝおそろしくッて傍へも寄り付けませン」

「浮世に物馴れた要助が、その體では萬事さやうの事に不馴れの者は、なか〳〵とても及ばンの、まづ軍門に降參しておいて後、ゆる〳〵」

「これはまァ、お二人で申し合せを遊ばして、この梅を、いぢめに入らしッたので御坐いますな、ほゝゝゝゝ妾風情のやうな女を、それでもいぢめ甲斐があると思召

して、わざ〳〵これまでは何とも恐れ入りまする譯、實はあまり、有難迷惑に恐れ入りまして、お禮の申し上げやうも御坐いませンから、どうか此まゝで御免を蒙りたう御坐います、要助さン、よく後を御取持下さいまし、ほゝゝゝ」

「やアいよ〳〵鋒鋩が激しくなッて來た、お梅さン、どうしたもンだ、さう急腹を立てられては、折角お伴して來た要助が形なしの丸潰れ」

「それ御覽遊ばせ、報いは覿面、妾のやうなものでも、人をいぢめるもンでは御坐いませンよ、ほゝゝゝゝ、いぢめさへなさらないなら、いつまでも此まゝ御意を得て少しでも、恐れながら、お馴染を重ねて置きたいのが眞實のところで御坐いますもの、初めての御客樣も憚らず憎らしい口をきかしなさいますのは誰の業で御坐います、ほゝゝゝゝ」

「いや道理々々、いよ〳〵要助が言葉死骸となッて仕舞ッた、さて要助が死骸となッて成佛いたした上は、あらためて生き殘ッたものが、はゝゝゝゝいさゝか太刀打を致して見ようかな」

「お對手が違ひます、ひらに御免を蒙りたう御坐います、何分、不意に押寄せられました女武者、どうして二度の太刀打が」

「はゝゝゝゝいよ〳〵要助は初太刀に仕留められた理由になッて來た、これからが二度の太刀打ださうだからの、さて梅どのとやら」

主水おもはず容を更めて膝を押し進むれば、お梅またおもはず花の顏を靜に振り上げて、おもむろに春の風を待つが如き風情、音もなく小膝を押し進めて衣絞をつくろひながら、わざとあるかなきかの小聲、やう〳〵忍び出でぬ、

「お手やはらかに願ひます」

「むゝ面白い、覺悟して、まゐる氣だの」

「お取替になりましては御損の御身分、妾が負けましても勝つ道理、もし怪我にも萬一、お負け遊ばしたら、そのまゝ、すぐに御歸りを願はしう御坐います」

「はゝゝゝ敵を武門より追ひ落す決心だな、いさぎよいく」

取替

また唄らあらねど、せめて現世の地獄あのまゝの闇に凋れて枯れ果てなば、なまなか浮世に色香の罪も應報もあるまじきを、おもはぬ不思議の緣に救はれし惡木のこぼれ種、あらたに根を替へ土を替へて芽を吹き出せしは其身の幸か不幸か一輪の花影、こゝに幾萬人の歩を停めし春の餘波もなし、

水は方圓の器に從へども、その水濁れば器こゝに清き甲斐もなく、人は善惡の巷を知れども、その人狂へば巷こゝに正しき甲斐もなし、

最初は亀澤町の日蔭に惜しや草の花、中途は兩國の水茶屋に四季不斷の色香を立てし名物お梅、果は我から落ちし其人を思ひ過ぎても惡魔に驅られて、また繰り返したる行末の運命、そも〳〵何がために唄はれけん、おのれが戀も謀みも破れて遁げ出したるまゝに一片の土饅頭いづこにありと知るものもなし、

さても愚ならぬ心を飜して、叶はぬ果の世を墨染の衣にかへしか、あてもなく彷徨うて知らぬ他國の空に木の根を肥せしが、花の朝、月の夕、さすが情の露に昔を今の涙とする人はあれど、すぎし名物お梅を餘所ながらに傳へるものは、いとゝ浮世の果の怖ろしさに行方も知れぬ物語とぞなしぬ、

浪六全集（第十六編）終

大正十五年四月十八日印刷
大正十五年四月二十日發行

不許複製

毒婦

定價金二圓

著者　村上猪

發行者　東京市日本橋區本石町三丁目十四番地　加島虎吉

印刷者　東京市本所區番場町四番地　岡守功

印刷所　凸版印刷株式會社

發賣所

東京市日本橋區本石町三丁目　電話大手一二三六番　振替口座東京一七四四番　至誠堂書店

東京市日本橋區住吉町二番地　電話浪花一九四九番　振替口座東京一六三六番　至誠堂第一分店

東京市本郷區本富士町二番地　電話小石川七五〇三番　振替口座東京一六九四番　至誠堂第二分店

浪六全集

縮刷

浪六先生の傑作

興味津々の快著

新式ポイント組
袖珍箱入美本
各冊金二圓
（郵税十錢）

第一編 當世五人男
第二編 當世五人男 黑田健次
第三編 當世五人男 上田力
第四編 當世五人男 倉橋幸藏
第五編 當世五人男 川上三吉
第六編 吉田雄藏・花車・しなさだめ
第九編 人間學

第十編 八軒長屋
第十一編 八軒長屋（後）
第十二編 八軒長屋（續）
第十三編 仍如件
第十六編 毒婦
第二十編 無遠慮
第廿三編 豐太閤

550
49

終